

糸島市行政発掘調査50年史

発掘調査と資料の保存・活用の記録

岡 部 裕 俊（伊都国歴史博物館館長）

I. はじめに

糸島市域に関する埋蔵文化財発掘の記録は1822(文政5)年の三雲南小路遺跡の発見に端を発した福岡藩士青柳種信による現地調査に遡る。その際に、さらに40年ほどさかのぼる天明年間(1780～1788年)に掘り出された井原鎧溝遺跡についても発掘者への取材と残存する出土品の調査も行われ、その報告は出土遺物の多くが散逸した現在ではこれらを研究・評価するうえで不可欠の情報といえる。

その後、古代遺跡に関する調査・記録は長く途絶えるが、大正～昭和初期にかけて中山平次郎による採集遺物の採集・分析、高橋健自らの出土青銅器の調査などにより糸島各地の遺跡の存在が知られることとなった。

戦後を迎えると1949(昭和24)年の原田大六による三雲石ヶ崎遺跡^(註1)、1950(昭和25)年の京都大学と福岡県教育委員会による銚子塚古墳の発掘^(註2)、1954(昭和29)年の文化財保護委員会による志登支石墓群の発掘調査^(註3)など学術的な関心・課題にもとづいた個別の発掘調査が実施された。1965(昭和40)年には農作業時の不時発見を契機とした平原遺跡の発掘調査が行われ^(註4)伊都国的重要性が古代史・考古学界において強く認識されるようになった。

これら糸島地域の黎明期の調査研究経過は柳田康雄氏の『伊都国を掘る』に詳しくまとめられている^(註5)。

その後、行政が主体となり継続性ある発掘調査が開始されたのは1974(昭和49)年の三雲遺跡の発掘調査からである。この調査は県営三雲地区圃場整備事業に伴い行われた緊急発掘調査事業ではあるが、第二次邪馬台国ブーム効果も相俟って伊都国への関心が高まった。三雲遺跡の調査が始まると朝日新聞社がその紙上で「伊都国レポート」と銘打った週一の連載記事を掲載し、発掘現場への見学者も多く観光客誘致も期待されたほどである。

この調査は現在の糸島市域において行政が主導

して行われた初の組織的長期的な発掘調査であり、その後、文化財保護事業の主担は徐々に当該市町村が主体となって進められることとなった。

本年度は奇しくも三雲・井原遺跡の発掘調査から半世紀を迎える年にあたる。筆者は前原町～前原市～糸島市へと自治体名が変わり、また昭和～平成～令和と三つの時代にわたる文化財保護に関わったことから、本稿を通じてこれまでの糸島地域における文化財保護行政の歴史を振り返りその足跡を記録としてまとめておくこととした。

この半世紀を振り返り、1979年にいち早く文化財担当職員が配置された旧前原町の様相を軸に旧志摩町、旧二丈町の動向を加えながらその変遷を追うこととし、組織・職員体制の変遷をもとに便宜的に7期に分けてその間に実施された調査・保護業務などを紹介する。

II. 埋蔵文化財保護・調査の変遷

第1期 (1974～1979年)

先述した三雲遺跡の発掘調査が実施された期間である。三雲遺跡の発掘調査は1974(昭和49)年に開始され1982(昭和57)年度まで継続され、これらの成果をまとめた『三雲遺跡』I～IVおよび南小路地区編(文献11～15)にまとめられた。その成果を活用した遺跡の変遷についての試案が1989年に刊行された『図説日本の古代』第3巻「コメと金属の時代」(中央公論社・註6)で初めて示された。

この変遷案は1994(平成6)年度から2016(平成28)年度まで実施された当該遺跡の範囲・構造の確認調査時の指標としても利用された。

三雲遺跡の発掘調査が始まった当初には、糸島で文化財保護を主務とする専門の職員が配置されておらず、調査・保護業務は福岡県教育委員会を中心に実施されており、あわせて国道202号線今宿バイパスや二丈浜玉道路の建設に伴う発掘調査も県に委託された(文献I～10)。

三雲地区の圃場整備事業の範囲は、後に開始される他の地区的な県営圃場整備事業と比較すると事

業面積は狭かったが、遺跡の密度、その歴史的重要性を鑑みて十分な保全を図ることを前提に開始されたことが前掲報告書の冒頭に記されている。試掘などの予備調査をもとに埋蔵文化財の状態の確認を行なながら施工方法が検討され、盛土による遺構保存が積極的に行われた。

この地道な遺跡の保存手法は、盛土土砂の確保に課題を残しながらも本市におけるその後の大規模圃場整備事業における埋蔵文化財保護の基本方策として定着し、着手前の早い段階での事前審査・協議の定例化、ついては埋蔵文化財の現状保存に繋がり、その後、2017(平成29)年の三雲・井原遺跡の国史跡指定で実を結ぶことになった。

福岡県教育委員会の三雲遺跡調査への力の入れ様の凄さは発掘調査の陣容を見ても明らかで、当時、県の文化財調査に携わった多くの調査員や学生が三雲遺跡に集結し調査に従事したことはその表れである。その成果は三雲遺跡の各報告書に縄文時代から中世にいたる様々な時代の遺構や遺物についてそれぞれの専門分野を生かした報告文が記されている。

この間、1979(昭和54)年度には史跡怡土城跡の保存管理計画がまとめられたことも史跡の維持・管理を進めるうえで重要な取り組みであった。

この時期に二丈町と志摩町でも、その後の伊都国研究に大きな波紋を投げかける重要遺跡の調査が行われている。広田遺跡、石崎曲り田遺跡、塚田遺跡、御床松原遺跡などである。

二丈吉井の広田遺跡の発掘調査は1978(昭和53)年に二丈浜玉道路の吉井インター建設に伴い行われたもので、縄文時代晚期初頭の指標となる土器群をはじめ土偶、石製品、玉類などの豊富な遺物が出土し、当該期の玄界灘沿岸地域における生業実態を探るうえで貴重な遺跡である(文献9)。

二丈石崎の曲り田遺跡は1979(昭和54)年度に国道202号線今宿バイパスの建設に先立ち行われたもので、夜臼式土器を伴う初期稻作農耕集落の遺跡である。当時の建物跡や墓群が確認され、後に橋口達也氏が提唱する「弥生時代早期論」の起点となった(文献4~6)。

1979(昭和54)年度に深江の塚田遺跡で琴柱形石製品が出土したことでも注目される(文献3)。

志摩町では1978(昭和53)年に御床松原遺跡の発掘調査が実施された。引津湾岸の砂丘上に展開

した弥生時代中期から古墳時代の集落遺跡で100棟を超える堅穴建物が調査され朝鮮系無文土器、三韓土器、楽浪土器、国内他地域の土器などとともに中国貨幣、鉄器などが出土し、弥生時代後半期の倭人社会と大陸との交易に深くかかわっていたことが明らかとなつた(文献173)。

第2期 (1979~1983年)

前原町に初めて文化財保護を専門とする職員が社会教育課(当時)に配置されたのが1979(昭和54)年である。前原町教育委員会としての最初の記念すべき発掘調査報告書は大字富のコンクリート工場の敷地内に所在した3基の後期古墳の発掘調査成果をまとめたものであった(文献16)。

当時は三雲地区に統いて新規の県営圃場整備事業(井原、泊、長野川地区)が次々計画・施工された。また、前原南小学校の新設(篠原新建遺跡)や町営老人ホームなどの公共施設の建設(伏龍遺跡)、民間宅地(上罐子遺跡第3次調査)、共同住宅建設(浦志遺跡A地点)、市街化調整区域の線引き前の駆け込みの開発申請などが重なり、これらの対応で多忙を極めた。

さらにこれと並行して1981(昭和56)年度には釜塚古墳や曾根遺跡の国史跡指定の調査・事務なども重ねて行われた。

このため発掘調査においては担当外の職員の応援や嘱託職員の雇用などにより業務体制の改善も図られたが追いつかず、調査報告書の作成にあたっては「発掘調査概要」と称して内容を年報的に簡便化したり、1980(昭和55)年度に発掘調査が行われた伏龍遺跡(文献20,23)や篠原新建遺跡(文献21,23)では複数年度にわたり分割報告するなど苦心の報告が続いた。井原遺跡群の圃場整備に伴う発掘調査では、遺跡の詳細を十分に報告する間もなく次の遺跡に対応をせざるを得ない状況が続く(文献23,25)など既存体制での対応の限界も露呈した。

厳しい状況が続いているものの、1983(昭和58)年には浦志遺跡A地点で舌付の朝鮮式小銅鐸が発見されて大きな話題となり(文献30)、同年度に行われた志登遺跡B地点では古代の道路状遺構の発見などの貴重な成果もみられた(文献31)。

重要遺跡の保護も進展をみせた。釜塚古墳は、1980(昭和55)年度に発掘調査が行われ横穴式石室の清掃と入り口部の発掘調査が実施されて、始

めてその構造が明らかにされた。

曾根遺跡群では、狐塚古墳、銭瓶塚古墳の発掘調査やワレ塚古墳の測量調査が行われた(文献22)。金塚古墳、曾根丘陵の古墳群と平原遺跡を合わせた曾根遺跡群はそれぞれ1982(昭和57)年度に国史跡に指定されるなど矢継ぎ早に保護の成果を積み上げていった。

一方、志摩町では1981(昭和56)年に奈良時代から平安時代の製鉄遺跡として八熊製鉄遺跡・大牟田遺跡が調査され製鉄炉、鍛冶炉、木炭窯などが調査され、その後、糸島全域で調査が進んだ古代製鉄遺跡の先鞭をつけた(文献172)。

第3期（1984～1987年）

前原町では井原地区、泊地区、長野川地区の県営圃場整備事業が本格化し最盛期を迎つつあった。夏場から開始される通年施工に加えて秋の収穫後に施工区が追加される秋施工が行われるなど事業が大幅に拡大されることでさらに発掘調査が過密化するとともに各事業地で広範囲な埋蔵文化財包蔵地の調査件数が増加の一途をたどった。

このため、専門職員を新規採用したり職場間の配置転換が行われるなどして職員の増員が図られ、1985(昭和60)年1月には埋蔵文化財担当職員が3名体制となった。

この期間に実施された三雲・井原遺跡の一連の発掘調査では、遺跡南端に位置する井原上学遺跡で弥生時代終末～古墳時代中期にかけての竪穴建物、箱式石棺を中心に木棺墓、石蓋土壙墓、甕棺墓などで構成される墳墓群、祭祀土壙群などの密な分布が確認され、井原下町遺跡では弥生時代後期の竪穴建物から完形の鋳造鉄斧が出土するなどの成果があった。

さらに赤崎川に面した段丘斜面から古墳時代の竪穴建物群や掘立柱建物群が発見されるなど古墳時代の集落が予想外に広範囲に集落が展開する状況や時期が下るにつれて南に移動している状況などを目の当たりにすることになった。

1986(昭和61)年度には工事に先立ち井原1号墳の測量調査が行われ、古墳時代前期の前方後円墳であることが明らかとなり(文献51)、墳丘の現状保存が決まった。

一方、長野川流域では中流の東地区で弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代～中世の集落や環濠居館など新たな遺跡が次々に発見され広範囲で

調査が行われた。

しかし、圃場整備関連の調査成果について、井原地区では井原下町遺跡(文献34)、井原上学遺跡(文献25)、井原丁ノ坪遺跡(文献51)、井原ムクナシ遺跡(文献47)、井原塚廻遺跡(文献54)、長野川流域では、長野宮ノ前遺跡、東高田遺跡(文献48)の報告書が刊行されたが、その他の遺跡では概報に留まり(文献36・45)、未報告のものが目立つ。

この時期、1985(昭和60)年度には筑前前原駅南側の丘陵地帯(大浦地区)において新規の土地区画整理事業が着手されこれに伴う発掘調査が開始され(文献41)、1982(昭和57)年度には民間高層住宅の建設に伴う寺浦遺跡の調査(文献43)、1988(昭和63)年度には国道202号線今宿バイパスの延長に伴う発掘調査(文献53)が始まるなど職員の増員を上回る頻度で住宅建設や道路整備など新たな開発行為に起因する発掘調査が急増した。

これらに対処するため1988(昭和63)年度には文化財担当職員が4名となったが、このうち2名が大規模開発を担当することとなり、県営圃場整備事業に対する担当職員の実数は減少するなど苦難の期間が続くこととなる。

文化財公開施設の整備に着手したのがちょうどこの頃であった。1987(昭和62)年7月25日には伊都歴史資料館が開館したが、この開館の準備にあたるため開館を半年後に控えた2月に1名が急遽その担当として割かれることとなる。

間が悪いことにちょうどこの年度から重要遺跡の保護に向けた調査も開始された。まず泊大塚古墳群の調査が開始されることとなり初年度に御道具山古墳群の調査が行われた。1号墳が箸墓古墳と相似形の定形型前方後円墳で後円部に葺石と周溝をめぐらすことや、主軸上に並ぶ2号墳が一辺14mの周溝を有する方墳であることが確認され、さらにその周囲にも低墳丘墓が存在することが予測された。当初は筆者が発掘調査を担当したが中途から資料館準備担当となつたため調査を完遂することはできなかつたことは残念であった。

翌年度には泊大塚古墳の墳丘測量を行なった。墳丘は土採りや畑造成により大きく損壊していたものの後円部径が45m以上を測る前方後円墳であることを確認した。しかし、当時は前方部は完全に削平されたと誤認していたため、近年、前方部の基底部が残存していることが明らかとなりそ

の評価は大きく変わりつつある。

しかし、泊大塚古墳群の調査は先に述べた開発ラッシュへの対応、さらに平原遺跡、三雲・井原遺跡など重要遺跡の保存に向けての新たな取り組みが追加されたことで、これに押される形で長く調査が中断を余儀なくされることになった。その課題は現在まで持ち越されている。

志摩町では1984(昭和59)年度に志摩師吉で民間の宅地造成に伴い稻葉古墳群の調査が行われた。この結果、糸島地域最古クラスの前方後円墳であることが確認された。

墳丘は後世の開墾等でひどく傷んでいたが残存する墳丘から原形が推定され、後円部と前方部の頂上からそれぞれ大小の竪穴式石槨が検出されたが副葬品はほとんど残っていなかった(文献175)。

なお、このとき前方後方墳とされた2号墳は2基の低墳丘の方墳と考える。

1986(昭和61)年度に新町遺跡において弥生時代早期の支石墓群が発見され、橋口達也氏が担当して発掘調査が行われた(文献177)。この後も継続して調査が行われ専門職員の配置の契機となった。遺跡は2000(平成12)年に史跡に指定された。

翌1987(昭和62)年には前原町でも同時期の支石墓を含む弥生早期の墳墓群(長野宮ノ前遺跡)の発掘調査を行った(文献46)。この調査は筆者が担当したが同種の重要遺跡を近接地で相次いで発見・調査されることに不思議な巡り合わせを感じるものである。

同年に行われた久保地古墳群では付近に露頭する玄武岩の柱状節理を利用した2基の横穴式石室墳の調査が行われた。芥屋大門に近いこの地特有の横穴式石室である。2号墳から出土した心葉形垂飾環耳飾は、当地首長の朝鮮半島勢力の密接な交流を物語るものと考えられる(文献176)。

第4期（1988～1994年）

1988(昭和63)年7月には前原町の機構改革が行われ文化課が誕生した。広く文化財全般を担当する文化財係と一般文化の振興業務を主務とする文化振興係の2係制となった。前原町では職員が1988(昭和63)年と1993(平成元)年に各1名が新たに採用され専門職員は6名体制となった。

この時期の最大の話題といえば1990(平成2)年に平原1号墓関連の遺物が一括して重要文化財に指定されたことであろう。1965(昭和40)年

に発見され復元された直径46.5cmの大鏡は糸島のシンボルとして輝きを増し、さらに16年後の2006(平成18)年には国宝に指定されることとなる。

県営圃場整備関係の埋蔵文化財調査においては、井原地区および長野川地区県営圃場整備に伴う発掘調査がピークを迎え、前期に引き続きそれぞれ1名の職員が担当として半ば専従することになった。施工側には極力盛土による遺構保存を要望したものの、施工面積が広かつたことから各事業区内において複数の発掘調査を実施することが求められ、調査現場を次々に梯子しながら連続して調査することが多くなった。

この間に行われた主な発掘調査は、井原地区では怡土平野の南奥部における古墳時代～中世の集落、井原作出遺跡、南田古墳、正恵古墳群、西堂四反田遺跡など山裾に展開した古墳群である。雷山地区では高上石町遺跡で弥生時代中期前半の甕棺墓群が調査された(文献60)。井原塚廻遺跡では古墳時代前期～中期の竪穴建物群とともに弥生時代中期後半から後期初頭にかけての墳墓群が調査され(文献54)、近年は中期後半の墳丘墓であることが判明するなど重要な成果となった(文献246)。

長野川地区ではこちらも平野の南奥部で発見した飯原門口遺跡で縄文時代から古墳時代の集落、墳墓の調査が行われた(文献88)。また、弥生時代後期の道路状遺構を検出した東高田遺跡(文献48)もこの時期に行われた。

新たに多久川地区でも県営圃場整備事業が着手され、1990(平成2)年度の多久元多久遺跡、1995(平成7)年度の香力梶原古墳群などが主な調査であるが、その後の多久柿原遺跡や富長浦遺跡の調査にその成果が生かされることになる(文献95)。

しかし、この期間の調査成果も未報告のものが多く、県営圃場整備事業に関連する調査報告書停滞の一因となったことは否めない。

前原町では既に各種事業に伴う調査で手一杯となり、1989(平成元)年度に計画された今宿バイパスの前原インター建設予定地の調査には調査体制を整えることができず、急遽、福岡県県教育委員会に調査をお願いすることとなった。弥生時代中期の甕棺墓群や奈良時代の鍛冶遺構、近世墓地等の調査が行われた奈良尾遺跡である(文

献8)。中間研志氏が調査を担当した。

県道の建設に係る発掘調査として実施されたのが本・加布里線で実施された本田孝田遺跡と東スス町遺跡の調査である(文献65)。本田孝田遺跡は本遺跡群北端に開削された人工の湧水地で弥生時代中期後半～古墳時代前期の土器溜めが出土し、合わせて木器、青銅製鋤先も出土した。このうち黒漆塗り木製容器蓋は後年、朝鮮半島系の精製容器の蓋であることが判明した(文献248)。

1988(昭和63)年度からは平原遺跡の史跡指定範囲の拡大に向けての発掘調査が開始された。この現地調査は1999(平成11)年度まで続くことになり、その経過は概報に綴られた(文献49,52,59,66,72,75,77)。

1991(平成3)年10月には荻浦地区土地区画整理事業に伴う発掘調査が開始され約2年をかけて調査を行った。筆者は調査の主担としてこの期間の調査に従事した。

事業地内では古墳時代初頭から7世紀までの古墳14基、奈良時代の火葬墓群、古墳時代の集落、岩上祭祀遺構、奈良時代の集落および製鉄工房、江戸時代の水田跡などの調査を行った。

古墳群では古墳前期と後期の小型前方後円墳各1基を含み、前期の立石1号墳では方格T字鏡を副葬した割竹形木棺、小児を埋葬した土器棺が出土、後期の砂魚塚1号墳では、横穴式石室から武器、馬具、豊富な装身具などか副葬されていた。他にも古墳時代前期の甕棺を埋葬棺とする低墳丘墓(前田古墳)や石川古墳、中・後期古墳群(坂ノ下、立石、石川)なども調査し、当該地域の古墳時代～歴史時代にまでの墓制変遷のモデルパターンを提示することができた(文献74,116)。

調査期間中には市民対象の現地説明会を2回開催するとともにカラー刷りの調査速報誌3冊を刊行するなど文化財調査の速報公開、普及啓発にも力を入れた。

前原市の富～本に跨るゴルフ場建設用地では、富井ノ浦古墳(中期)、本辻ノ田古墳群(後期)などの発掘調査が行われた(文献69)。

富井ノ浦古墳は狭い丘陵の前後を切断して築かれた小型の方墳で古式横穴式石室の墳丘裾に鳥足状タタキを有する陶質土器の壺が出土していることは留意される。

この調査で特筆されるのはその一角から江戸時

代後期の領地境を示す境石群が確認されたことである。敷地内にちょうど幕府・福岡藩、中津藩の領境があり、宮地嶽山頂から東地区の丘陵上までの2.0kmにわたって境界石が設置されていた。その屈曲点の位置は現在の土地境界ともほぼ符合しており詳細に照合することができた(文献248)。この境界石群は開発から除外されて保存緑地として保護が図られた。

ちなみに幕府と福岡藩領の境界はさらにその南にも長く延びて雷山中腹まで続いており、これらの所在は郷土史家前田時一郎氏の地道な調査によって明らかにされた(註7)。2017(平成29)年にはこれらを一括して「福岡領境の境石群」の名称で市の史跡に指定されている。

潤地区における発掘調査の先駆けとなったのが1990(平成2)年に行われた潤毫丁田遺跡である。旧加布里湾に近い標高6mの微高地の縁辺に古墳時代前期の土師器があたかも据え置かれたように出土し組み合わせ式案の部材なども出土した。水辺の祭祀場と考えられる(文献57)。

この時期に二丈町に2名、志摩町に1名の専門職員が採用され、従来の県からの支援に頼る調査体制から自治体独自の取り組みへと移行する大きな変換点となった。二丈町では萩の原古墳群の調査が端緒となり、志摩町では四反田古墳群の調査がその出発点となった。

二丈町では石崎地区を中心に重要遺跡の調査が相次いだ。1988(昭和63)年度末の萩の原6号墳の調査(文献145)に続き1989(平成元)年度に石崎矢風遺跡の第1次調査が行われ、弥生時代前期前葉の支石墓、甕棺墓、木棺墓などが調査された(文献203)。

1990(平成2)年度には、深江井牟田遺跡(二丈町)の調査では砂丘上に弥生時代中期～古墳時代にかけての集落の存在が確認され、楽浪土器や青銅製短剣などの大陸系遺物がまとまって出土し、伊都国西部における大陸との交流拠点の一つとして俄然注目されることになった(文献136)。

1991(平成3)年度には竹戸東縄手遺跡で弥生時代前期の二条の大溝が検出され、集落の区画溝である可能性が指摘された(文献166)。同年から3次にわたる調査が行われた木舟三本松遺跡は県営圃場整備事業に伴うもので、69基の甕棺墓が調査され、ヒスイ勾玉、磨製石剣、碧玉管玉などの

副葬品が出土している（文献137,142,143）。二丈町では職員の複数配置が功を奏したことがわかる。

1992(平成4)年度の石崎大坪遺跡では、弥生時代早期と中期の水田遺構が検出された。水田区画や井堰などを検出しておらず、現在まで糸島市域で確認されている唯一の弥生時代水田として貴重である（文献139,140）。

また、同年に実施された木舟の森遺跡の調査では平安時代末期の環濠居館が発見され龍泉、同安窯系青磁、白磁と共に近畿系黒色土器等も出土し、この居館の主が中国貿易に深く関わる有力者と考えられ、当時この地に強い影響力を有する原田氏との関係がうかがえる（文献140）。

1993(平成5)年には松末の唐船古墳群の調査が行われた。二丈地域では唯一調査された終末期古墳群でいずれも谷間斜面に馬蹄形の周溝をめぐらせた横穴式石室墳である。4号墳からは豊富な装身具とともに鉄製武器、須恵器などが出土している（文献235）。

1994(平成6)年度には、福吉中学校の西の丘陵とその周辺に所在する弥生時代集落、水付遺跡の発掘調査が行われた。後世の開墾で遺構はかなり消失していたが、土器溜まりから出土した後漢鏡片、硬玉製勾玉などの装飾品、L字形石杵などから小平野をなす当該地域の拠点集落であるとともに、松浦地域との境界に位置することから対外的な防御機能も備えた集落としても重要と考えられる（文献170）。

ちなみにこの北側砂丘からは弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての福井式甕棺が数多く発見されている（文献168）ことも留意される。

志摩町職員の最初の調査となったのが四反田古墳群である。

1990（平成2）年に志摩歴史資料館東の低丘陵上に立地する古墳時代中期前半の6基からなる古墳群で、古墳群の保存を目的として調査が行われた。最大規模の3号墳からは2基の竪穴式小石槨が並んで検出され、盗掘は受けていたもののそれぞれ異形の琴柱形石製品と滑石製勾玉、ガラス小玉と碧玉製管玉が副葬されていた（文献183,185）。

1991（平成3）年に行われた新町遺跡V区の調査では縄文時代後期の貝塚が発見され、そこで検出したサルボウガイ製の貝輪を装着した女性人骨は思い出深い（文献185）。横向きに膝を曲げた屈

葬状態で右腕に14枚、左腕に7枚が装着されていた。新町遺跡では弥生時代に留まらず縄文時代の人骨も良好に残存することが確認され、わが国の形質人類学上重要な遺跡であることが確認された。後年には、同種墓が隣接する岐志元村遺跡でも確認され、この意義をゆるぎないものとした（註9）。

この時期における前原市域の思い出深い発掘調査といえば1994(平成6)年度に行った上罐子遺跡である。18,000m²の広い面積を9か月の短期間で行ったが、弥生時代の1,500点におよぶ木器をはじめ土器、石器など多くの資料が出土した。近年、ようやくその調査成果をまとめることができた（文献228）。

同年に刊行した報告書『井原地区周辺の古墳群』（文献67）では、初期横穴式石室を有する西堂四反田遺跡をはじめ井原地区県営圃場整備事業の関連で調査を実施した前期～後期の古墳の調査成果を一括して報告したが、巻末に西堂古賀崎古墳について報告できたことも大きな調査成果です。

西堂古賀崎古墳は1958(昭和33)年に納骨堂の建設に伴う造成工事で発見され、原田大六氏が調査を実施している。単龍環頭大刀、f字形鏡板、剣菱形杏葉、胡籙金具、装飾須恵器など貴重な副葬品が多く出土しているながら未報告となっていた。この地区の古墳文化を明らかにするうえで欠くことができない古墳であり、古墳の現況と発見当時の図や写真と共にすべての遺物の図と写真を加えて報告した。墳所は前方後円墳であり、今後その保護のための調査は必須である。

1994(平成6)年からは雷山ゴルフ場の建設に伴う井原・西堂・川原区の山稜部の発掘調査が実施された（文献125,126）。怡土平野では最大の後期古墳群であることからコース設計等において古墳の保全努力を強く依頼し、所在を確認できていた42基のうち前方後円墳（トリノス1号墳）1基を含め30基を現地保存することができた。

二丈町では森田遺跡で鎌倉時代の製鉄遺構などが調査されたが、特筆されるのは上深江小西遺跡で、弥生時代早期の掘立柱建物群、縄文時代後期の竪穴建物を含む集落遺構群が調査されたことであろう。前者は既に報告されている（文献147）。

第5期（1995～1999年）

1995(平成7)年に志摩町歴史資料館が開館し、

さらに1997(平成9)年度からは伊都歴史資料館付けの学芸員として筆者が配置されることとなつた。前原市ではこれ以後、資料館担当の学芸員が常駐されることとなり企画展が定例で開催されるとともに糸島地区社会教育振興会などと協同で糸島地域全体を見据えた相互の啓発活動の協力・連携が推進されることとなった。

この資料館の職員配置は次期の新たな人事に刺激となるとともに次世代職員の採用・確保にも脈動を与えたと考えられる。早速、1998(平成10)年度に1名が新規に採用された。

この期を前後して、前原市域では県営圃場整備事業が収束に向かいこれに起因する発掘調査は減少したものの、替わって市街地の再開発やインフラ整備に伴う発掘調査、重要遺跡の保護に向けた取り組みに徐々にシフトしていった。

1994(平成6)年度から三雲遺跡群(後の三雲・井原遺跡)の指定に向けての発掘調査が開始され、翌年度にはこれらの調査指導機関として三雲遺跡等発掘調査指導委員会が設置された。

1998(平成10)年には平原遺跡の指定地内の再発掘調査が行われた。1号墓から東に少し離れたところに掘られた直径70cmほどの垂直土壙が大柱の掘方であったことが判明するとともに、これと日の出の方向との関係を検証した新説が提示された。また南側(2号墓)や西側(5号墓)にも墳丘墓が存在することが確認されるなど多くの成果(文献86)があがつた。その背後には1996(平成8)年に福岡県文化財保護審議会が建議した『福岡県重要・大規模遺跡の保存活用基本計画』のなかで、県下の遺跡のうち最重要の5遺跡の筆頭として伊都国地域が選定されたことによる福岡県教育委員会の強力な後押しがあった。

三雲遺跡の呼称については、1990年代の調査で三雲南小路遺跡以南の井原地区にも集落や墓地が展開することが判明し、天明年間に発見された井原罐溝遺跡は現在も三雲区と隣接する井原地区内で発見された可能性が高いとされた。

このため1996(平成8)年刊行の報告書(文献79)では遺跡名を「三雲・井原遺跡」と二つの行政区名を併記して記されるようになり現在にいたる。この遺跡名の変更は、2004(平成16)年度に県道の拡幅工事に伴った発掘調査で弥生時代の有力層墓群を発見したことにより的確であったことが明

らかになった(文献108)。

二丈町では、この期に新たに文化財担当職員が1名採用された。糸島地区の新たな葬祭場の建設に伴い1997(平成9)年度～1999(平成11)年度にかけて石崎曲り田遺跡の大規模な発掘調査を実施した。調査によって縄文時代中期、弥生時代、古墳時代前期、平安時代の遺構・遺物などが確認され、とりわけ9世紀の道路状遺構や掘立柱建物、井戸、外来系陶器、墨書き土器などが出土し(文献155)古代西海道の遺構として注目されている。

志摩町では1996(平成8)年度に初地区の平野を見下ろす丘陵上に立地する引ヶ浦古墳の調査が行なわれ、糸島半島では珍しい屍床を設けた5世紀中葉の横穴式石室が調査された。天井部は大きく損壊していたが屍床には鉄刀、鉄鋸、鉄鎌などが副葬され、陶質土器の小壺も出土している(文献189)。

第6期(2000～2009年)

21世紀を迎える前原市では平原遺跡をはじめとする国史跡の追加指定・公園整備、伊都歴史資料館の新館建築など埋蔵文化財の整備・公開に向けて大きく事業が展開された期間である。前原市では新たに資料館係が置かれるとともに2000年(平成12)年度に2名、2002(平成14)年に2名、2003(平成15)年度に1名と職員の新規採用による増員が進められた。

2000(平成12)年には平原遺跡の指定地が大きく拡大され、2005(平成17)年度末に竣工した史跡公園の1次整備への布石となった。

発掘調査では、2000(平成12)年度に行った三雲南小路遺跡の調査で王墓甕棺の周囲を囲む周溝の存在が確認され、一辺34mほどの方形の墳丘墓であることが判明した(文献94)。またその翌々年には下西地区で一辺45mほどの方形環濠区画溝とみられる遺構が検出される(文献102)など新たな成果が積み上げられた。

三雲・井原ヤリミゾ地区の墳墓群の調査は継続して行われた結果、木棺墓、土壙墓、石棺墓、甕棺墓など総計70基の墓群が検出されこのうち21基からは副葬品が出土する有力層墓群であることが判明した(文献210)。

一方、2004(平成16)年に行った潤地頭給遺跡の調査成果は衝撃的であった。現在の東風(はるかぜ)小学校建設に伴う20,000m²の敷地とその周

辺の発掘調査であったが、敷地の北東部で発見された弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴建物や掘立柱建物の多くから出雲を原産とする碧玉や産地未確定の水晶、メノウなどを原料とする玉作り跡がみつかり、当時国内では最大級の玉作り工房群であったことが判明した。その後の調査で周囲の古今津湾沿岸地域において広範囲で玉作りを行っていたことが明らかとなってきたが、これらの中的な集落になる可能性が高い。これ以外にも総数約360基の甕棺墓群や墳丘墓、弥生時代中期の大溝や掘立柱建物群、祭祀土器群、中世の環濠遺構など重要な遺構や遺物が目白押しである（文献105）。

この時期には史跡を含めた重要古墳の確認調査が積極的に行われ多くの成果を収めた。

史跡釜塚古墳は2002（平成14）年度から3か年にわたって行った発掘調査で釜塚古墳周囲にめぐらされた幅5～7mの周濠とさらにこれを囲む外堤帯を確認した。外堤帯の推定径は89mにおよぶ。さらに周濠のそこからは九州では初の出土となる石見型木製品が出土し、古墳時代中期前半の糸島地方を代表する大首長墓であるとともに近畿のヤマト王権との密接な交流もうかがわせる（文献224）。2020（令和2）年度に史跡の指定範囲が外堤帯域まで大幅に拡大された。

また、史跡曾根遺跡群のうち錢瓶塚古墳のくびれ部から前方部にかけての形状確認調査が行われ、くびれ部裾付近から小型の岩偶が出土し話題となった（文献103）。この成果をもとに前方部の簡易整備を行い、形状の平面表示を行った。

さらに同遺跡群のワレ塚古墳の発掘調査も実施し、墳丘のくびれ部から前方部にかけての平面形状と周溝を確認することができた。墳丘には円筒埴輪が比較的良好に樹立した状態で残存しており、前方部斜面では、馬形埴輪、人物、動物とみられる形象埴輪片が出土しており、これらは前方部上に配置されていたこと須恵器などの土器の出土からこの地で祭祀が行われていたことが判明した（文献104）。

この成果も今後の保存整備に活かされると思うが残念ながらこの正式な発掘調査報告書は刊行されないままとなっている。

井原1号墳は2001（平成13）～2002（平成14）年度の発掘調査で前期後半であることが明らかと

なった。後円部の大破した大型箱式石棺の棺外から辛うじて出土した鉄器の中には鋸や錐などの舶載工具が布に覆われた痕跡を残して一括して出土した（文献99）。

二丈町では中山間地域総合整備事業の一環として吉井地区遺跡群の調査が開始され末広、為次遺跡（文献156）、柚木田遺跡（文献160）の調査が行われた。吉森遺跡の調査も行われ、中世集落の様相とここで行われた製鉄の実態が明らかにされた（文献205,208,212）。文献212では、糸島地域の古代製鉄史が丁寧にまとめられて参考となる。

志摩町の稻留地区県営圃場整備事業に伴い実施された一の町遺跡の発掘調査は1997（平成9）年度から2005（平成17）年度まで行われた発掘調査で弥生時代中期～古墳時代前期にかけての集落が発掘され、4棟の大型掘立柱建物を含む掘立柱建物や円形竪穴建物、土器溜まりなどが検出された。糸島半島地域中央部の拠点的集落の一つと考えられている（文献200）。大型建物は床面積が100m²をこえる当時としては最大級の建物とされ建設された背景に关心が集まる。

第7期（2010～）

前原市、志摩町、二丈町が合併し糸島市が誕生し、職員体制は文化財担当職員6名、博物館担当職員5名の体制での新たな体制で文化財保護事業に当たり、2024（令和6）年度12月現在で正規職員の総数は11名である。

2015（平成27）年度には三雲・井原遺跡の番上地区で弥生時代終末の土器などと共に楽浪土器や板石硯とみられる石製品が出土し話題となった（文献221）。

志摩井田原の開古墳は開墾により大きくその形状が損なわれているものの、測量調査の後に行われた墳丘の確認調査により全長90mの糸島第2の規模を誇る前方後円墳であること、採集された円筒埴輪の中に九州では鋤崎古墳（福岡市）、御塔山古墳（杵築市）に次ぐ鱗付円筒埴輪を有することが明らかとなった（文献209）。今後の保護対策が急務となる。

また、発掘調査は行っていないが、二丈田中の銚子塚古墳（通称一貴山銚子塚古墳）では1950（昭和25）年以来の墳丘の測量調査を実施し、想定される墳丘規模が、指定当初の103mには及ばず96.5mほどになる見込みであるものの、

墳丘が基底部からほぼ盛土である可能性や主軸の沿って作り出しが造作されていた可能性があることが判明し（文献251）、こちらも2020（令和2）年度に史跡の範囲が墳丘の周囲にまで拡大された。

長野川中流西岸の荒毛2号墳は、長糸小学校背後の危険斜面の改善工事の際に墳裾の葺石を削り落としたことに起因して緊急に発掘調査が行われた結果、全長が80mを超える前方後円墳であることが確認された（文献254）。後円部には松浦砂岩を用いた大型箱式石棺を含めた複数の埋葬棺が納められた可能性がある。調査の初動の審査体制には大きな課題を残した。

1988（昭和63）年度から断続的に行われた多久口木古墳群（文献55）も興味深い。1号墳は丘陵の斜面に築かれた6世紀末の巨石を用いた複室構造の横穴式石室墳、2号墳はそれに先行するもので丘陵の尾根筋に築かれ、最も古い3号墳は横穴式石室を主体部とする5世紀末の前方後円墳で、2017（平成29）年に調査が行われた（文献220）。いずれも国道202号線バイパス関係の工事で消失したが、多久川流域における歴代首長墓の系譜にのる古墳とみられ、2号墳から出土した棘葉形杏葉はその出自を探るうえで興味深い。

III. 文化財公開施設と埋蔵文化財資料の保管・活用

1. 伊都国歴史博物館の開館まで

糸島地域における文化財調査研究拠点としての博物館の先駆けは1931（昭和6）年の糸島高校開校10周年を記念して設置された郷土資料室の開室に遡る。1956（昭和31）年には高校附属郷土博物館として高校では国内唯一の博物館相当施設となり現在にいたる。考古資料の展示は基本的には採集資料や不時発見・発掘資料により構成されるが、弥生時代後期の甕棺や古墳に関する資料や発掘調査の成果が同校の文芸誌に報告されており学術的価値が高いものも多い（註7）。

行政的には1961（昭和36）年に建設された志登支石墓群収蔵庫が初の展示公開施設である。その後1974（昭和49）年度には伊都国資料館と名前を変えたが、1987（昭和62）年の伊都歴史資料館開館の直前まで考古資料を中心とした資料の公開施設として運営された。

伊都歴史資料館は、平原遺跡からの出土品の公

開を最大目的に開館した。しかし、開館当初から9年間は専門学芸員が配置されず平成2（1990）年のとびうめ国体に合わせて、糸島地方から出土した葬送儀礼に関連する土器を集めた「鎮魂の器」展を開催したが、取り組みは広がるはずもなく、その後学芸員の配備は1997（平成9）年まで待たねばならなかつた。

毎年の定期企画展の開催はこの年秋の「再見！糸高の博物館」に始まり、現在まで27年間毎年継続されている。

なお、2000（平成12）年には資料館係が設置されたが係長1名のみの配置という厳しい運営体制からはじまつた。

その後、2004（平成16）年10月に伊都歴史資料館の南東に隣接して新館が建設され、総合的な歴史系博物館として新・旧館一体とした伊都国歴史博物館が誕生した。職員体制も徐々に整備増員されて現在にいたる。

2. 博物館収蔵資料のデジタル管理

伊都国歴史博物館には、収蔵資料の画像資料とともに本市がこれまでに実施した埋蔵文化財の発掘調査に関する画像資料も多く保管されており、量的には後者が凌駕する状況にある。前原市では、調査報告が完了した遺跡の情報については作成された実測図等の資料と共に白黒ネガ資料、カラースライド資料を博物館において保存管理することを申し合わせていたためである。同様の措置は旧志摩町で行われたよう、発掘調査に関する資料は基本的に志摩歴史資料館で保管されており、前原市、志摩町、二丈町が合併した2010（平成22）年以後はこれ等の資料・情報の管理が課題となつた。

博物館の開館以来、収蔵資料管理の効率化・正確化は課題であった。開館当初は収蔵資料の紙台帳・目録が作成されてはいたが、収蔵スペースが必要で検索にも時間を要するなど少人数での博物館運営に支障をきたした。

発掘調査の記録写真ではカラー写真の劣化が認められるなどの課題があつた。

図書は伊都歴史資料館の開館直後からカード管理を行っていたが、こちらもカード作成・配架、図書検索などに時間を要し職員の負担となつた。

これ等課題の解決策として取り組んだのがこれ

ら台帳目録のデジタル化であった。

① 収蔵資料のデジタル台帳の作成

伊都国博物館で収蔵・管理している歴史資料は考古・歴史・民俗・古文書の各分野において、文化課所管の伊都郷土美術館の作品も合わせた資料管理の効率化は博物館としての喫緊の課題でもあった。

そこで2013～2014年度にかけて厚労省の緊急雇用再生補助事業を活用して収蔵管理資料のデジタル台帳化に取り組み、基本フォームの作成および画像撮影・項目の入力を進めた。その後のデータの追加登録も行い2024年12月末時点で考古20,197点・歴史・民俗1,139点・古文書3,914点となっている。

資料調査・貸出しなどの膨大な資料の所在検索には極めて有効で威力を発揮している。

② 発掘調査記録写真のデジタル化

2012～2013年度にかけて厚労省の緊急雇用再生補助事業を活用して本市の文化財調査などで撮影した記録写真のデジタル化を行った。対象としたのは埋蔵文化財の発掘調査記録の写真と博物館収蔵資料の写真で、劣化の進行が危惧されたカラースライドフィルムを中心に行い当時、伊都国歴史博物館と志摩歴史資料館に移管されていたカラースライドフィルムの大半はデジタル化することができた。

なお、後述するように報告書作成が未完了の写真がある一方、報告書が刊行されているにも関わらず、博物館に移管されていない調査写真があることが判明した。調査および報告書の刊行に携わった関係者の責務においてその所在の確認と移管をお願いするところである。

③ 文化財関係図書のデジタル台帳管理

本市では、年間に700冊(令和5年度実績)ほどの文化財関係図書を寄贈がある。大半は自治体や大学の埋蔵文化財発掘調査・研究報告書、博物館・資料館が刊行する図録・紀要・年報等で、市役所に送付された図書も博物館に移送され受付収納している。近年はOB職員などから寄贈の申し出をいただくこともあるが収蔵図書の重複による収納スペースの圧迫もあって辞退させていただくことも増えてきた。現在収蔵している図書は国内図書刊行物が36,685冊、韓国・中国関係図書が3,400冊程度である。図書の収蔵管理は調査研究における

「知の泉」であり極めて重要であるが、収蔵スペースの確保は喫緊の課題である。

IV. 埋蔵文化財の保存処理・修復

本市行政において所管文化財、特に埋蔵文化財の保存処理・修復が進められた初期の資料としては1980年に調査された坂元古墳群、1983年に調査された王丸浦ノ田古墳群、神在上ノ山古墳群の出土鉄器があげられる。これらは一括して九州歴史資料館に持ち込まれ緊急的な保存処理と修復が行われた。

これらの資料は報告書に掲載されたものもあるが、保存処理に時間を要したため報告書の掲載に間に合わなかったものもある。このうち坂元1号墳の出土鉄器は本館紀要の第17号において現状が紹介され本館の収蔵品に加えられることとなった。実測図など各資料の詳細な記録化は改めて実施する必要がある。

また、1958(昭和33)年に発見された西堂古賀崎古墳出土の金属器も緊急避難的に保存処理の措置が講じられた。これらのなかには黒漆塗单龍環頭大刀1振りを含めた大刀4振り、胡籙金具、f字形鏡板、剣菱形杏葉、刀子、鉄斧、U字形鉄斧などがあり、6世紀中葉の副葬品を検討する基礎資料の一つとして注目されている。残念だったのは再処理において鋸化した結合部やパーツ各部の構造について十分な検討を加えられずに再処理だけが実施されたことおよび新たに発見された鉄鎌群が保存処理対象から漏れていたことである。文化財を取り扱う以上、保存・修復に当たり資料の現状確認・構造解析など基礎的な調査研究は当然行うべきであった。

青銅鏡については、1980年から1995年にかけて坂元2号墳出土獸文鏡、荻浦立石1号墳、東真方A-1号墳出土の方格T字鏡などの保存処理が九州歴史資料館で実施していただいた。

1995年から開始された平原遺跡出土品の保存修復事業には本市も長く関わってきた。

保管展示設備の充実や環境整備も行い、2004(平成16)年の伊都国歴史博物館の開館へと進み、2006(平成18)年の国宝指定後も継続して保管展示している。

また、平原遺跡出土銅鏡の修復の間に津和崎権現古墳の画像鏡の基礎調査、保存処理も実施され

た。発見時に破碎鏡であったものが原田大六氏により欠失部が補填着色されて原状が不鮮明となっていたものが、X線撮影により、補填範囲が確認されたこと、また、鏡に付着していた纖維が苧麻であったことなど新たな知見を得た。

木器については1994～1995年に行われた上罐子遺跡から出土した大量の木器が契機となり、本市でも本格的な保存処理業務に取り組んだ。

保存処理開始当初は、樹脂の含侵期間が短く木器の収縮率が小さな脂肪酸エステル含侵剤でしたが、その後、含侵樹脂の安定性の再検討、資料の樹種や残存状態に応じてPEG含侵法、真空凍結乾燥法、ラクチトール含侵法など使い分けて業務を委託した。

しかし事業の進行に伴い業務の効率化を促進するため、2002年から職員による直営で保存処理業務も平行して実施した。この結果、保存処理業務速度は急速に進み2011年には小形木製品の保存処理を終了することができた。

ただし、建築材などの大径材や長もの材などは待機状態のものがありこれらへの対応は今後の課題である。

V. 調査成果の未来への継承

詳細不明の重要遺跡

埋蔵文化財の調査を行う上で、その成果をまとめた報告書の刊行・公開は避けて通れない課題である。本市においても調査の終了後の発掘調査報告書の作成は必須の作業として取り組んできた。これまでに刊行した報告書は本文末の表のとおりである。

しかし、残念ながら発掘調査が終了しても報告が完了していない遺跡は少なくない。

今後、筆者が報告書の作成が必須と考える調査事例として以下をあげておきたい。

東地区遺跡群 1985年から1988年にかけて長野川地区県営圃場整備事業の一環として大字東区内の圃場内における遺跡の発掘調査を行った。高田、太田、下田、五反田地区に分かれ15地点が調査された。このうち、報告書が刊行されたのは高田地区のみで他の地区については、本紀要第3号でその概要を紹介したにとどまる。

筆者も調査に携わった一人でありその責任を痛感するところである。

井原遺跡群 伊都国の拠点である三雲・井原遺跡から南さらに南に広がる沖積微高地に展開する古墳時代から中世にかけての遺跡である。

1987年～1990年にかけて井原地区県営圃場整備事業に伴い行われた発掘調査で瑞梅寺川支流の赤崎川の東西段丘に展開した古墳時代前期～後期の竪穴住居群が確認されており、三韓土器なども出土しており、伊都国以後の当地の動向を知るうえで重要である。

井田地区ではナカソリ遺跡で弥生時代前期の遺物が採取されているが、こちらも未報告となっている。

西堂・川原遺跡群 1989年(平成元)度の井原地区県営圃場整備事業に伴い行われた発掘調査で発見された。古墳時代前期～後期にかけての竪穴住居をはじめとする集落等が展開している。

今宿バイパス関係遺跡群 1987年から1990年にかけて国道202号線今宿バイパスの延伸に伴う発掘調査が行われたが、このうち、池田東地区、有田地区の調査成果が未報告である。有田地区には一部上罐子遺跡にもかかっており、古墳時代後期以後の集落や墓地が展開していたとされている。これまでの調査成果と合わせて遺跡の全体像を知るうえで重要な調査成果である

雷山ゴルフ場内古墳群 1993(平成5)年度から1995(平成7)年度にかけて、井原・西堂・川原地区にまたがる140haに及ぶ井原山裾一帯のゴルフ場建設に先立つ発掘調査が行われた。2冊の速報に示された古墳は場内で42基あるが、このうち前方後円墳1基含む30基が現地の緑保全地区に保存されている。

糸島地域では総数1,000基の大小古墳が確認されており、その半数は今宿平野に面した南の山稜地帯に分布するという偏在傾向が顕著であるが、当該古墳群はこれを除けば有力な古墳築造集団の一つといえ、早期の報告書の作成が求められる。

上深江小西遺跡 1993年に県営圃場整備事業に伴い約3,000m²にわたり発掘調査が行われたことが「二丈町誌平成版」(以後「町誌」)に紹介されている。このうち、弥生時代早期の遺構については報告書が刊行されているものの縄文時代後期の遺構については報告されていない。

「町誌」によれば縄文時代後期中葉から後葉にかけての土器とともに石器工房らしい黒曜石剥片

の集中箇所が検出され、この他堅穴建物4棟、貯蔵穴、溝状遺構、配石遺構も検出調査されているとされ、この時期の遺構としては極めて重要な調査成果と考えられる

塚田南遺跡 1996(平成8)年度から翌年度にかけて約8,000m²の調査が行われ、道路状遺構や掘立柱建物、溝状遺構などが確認され、深江駅の有力推定地であることが「町誌」に記され1998(平成10)年に町の史跡に指定されている。しかし、出土遺構、遺物、写真などは報告されておらず、「町誌」の記述を裏付ける資料は何ら示されていない。

史跡に指定した以上はその重要性を示す資料の報告および公開は最低限必要であろう。

潤地頭給遺跡 既にその重要性は述べたが、遺跡は東風小学校の校舎の下に多くが保存されている。この重要性を報告することは本市の責務であり、伊都国歴史、延いてはわが国の外交史古代史上においても極めて重要な遺跡である。早期の報告書作成をお願いしたい。

古加布里湾・古今津湾岸の集落遺跡調査成果 加布里湾南岸の北新地、上町向原、浦志、潤、志登地区では小規模ながら住宅建設、集合住宅の遺跡では調査事例があり、それらの多くは弥生時代中期～古墳時代前期にかけての集落や墓地であった。また古今津湾の最深部にあたる泊大塚遺跡やリュウサキ遺跡でも湾岸の狭い平地部から弥生～古墳時代の集落の一部が検出され、玉作の痕跡も認められた。これらはまさに伊都国の繁栄の証といえる遺跡群である。

これら事例の報告、公開が未来の周辺における開発等の指導に生かされるのであり、細心の注意をもって整理し報告するべきである。

VII. おわりに

これまで半世紀にわたる糸島市域の埋蔵文化財調査の足跡を、昭和54年度から糸島市制施行までを中心に足早にたどるとともに各遺跡や遺物に対する私見を付記した。

上記期間には、発掘調査だけでなくその分布状況を把握する取り組みも進められ、福岡県教育委員会による遺跡分布地図(1981年)に続いて1990年代には各自治体で分布調査が行われるとともに、過去の埋蔵文化財の調査結果と合わせて志摩町(1995年)・前原市(1998年)・二丈町(1998年)

の分布地図が整備された。

しかし、その後も遺跡の調査は進められ様々な遺跡の発見が相次いでいる。なかでも糸島低地帯を囲むエリアを中心とした標高10m以下の低地部では重要遺跡の発見が続いている。その成果は古代糸島地域の歴史的を探るうえで欠くことのできないものである。これらを未来に生かすためには古地形の復元も意識した精緻な分布地図の作成も必要と考える。

また、本市には国指定史跡8件、天然記念物1件、有形文化財7件が所在する。これらの保存を強化し活用につなげるためにも「文化財活用地域計画」の策定が急務であり、これを核とした各遺跡等の「保存活用計画」の策定・整備も求められる。

文化財保護に携わる担当者の世代は替わり、業務に対する考え方も変わりつつある中、本市の文化財収蔵庫にはいまだ十分な引き継ぎが行われることなく多くの未報告資料が残されている。これらの調査経過を記し今後の取り組みの布石になればという思いから書き始めたが、紙幅の都合もあり十分な解説にはいたらず申し訳なく思う。

拙文が本市における今後の文化財保護の取り組みの歴史を振り返り未来に向けての展望を見えるときにその一助となれば幸いである。

註

- 註1 原田大六1952『福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地』『考古学雑誌38-4』
- 註2 小林行雄1952『一貴山銚子塚古墳の調査報告書』福岡県教育委員会
- 註3 斎藤忠・鏡山猛1956『志登支石墓群』文化財保護委員会
- 註4 原田大六1965『福岡県平原弥生古墳調査概報』福岡県教育委員会
- 註5 柳田康雄2000『伊都国を掘る 邪馬台国に至る弥生王墓の考古学』大和書房
- 註6 森浩一1989『図説日本の古代第3巻』中央公論社76～77頁
- 註7 前田時一郎2006『糸島の国境石と領境石』
- 註8 堀本一繁2016『福岡県立糸島高等学校郷土博物館公式ガイドブック』福岡県立糸島高等学校
- 註9 宮本一夫2000『福岡県岐志元村遺跡』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

福岡県						
文獻番号	種別	番号	発行年	書名	編著者	備考
1	報告	5	1977	今宿バイパス関係調査報告書	栗原・上野他	上罐子遺跡
2	報告	6	1982	今宿バイパス関係調査報告書	橋口達也	波多江遺跡
3	報告	7	1982	今宿バイパス関係調査報告書	橋口・中間	塚田遺跡 懐懐石八幡宮裏古墳 赤岸遺跡
4	報告	8	1983	今宿バイパス関係調査報告書	橋口達也	石崎曲り田遺跡 I
5	報告	9	1984	今宿バイパス関係調査報告書	橋口達也	石崎曲り田遺跡 II
6	報告	11	1985	今宿バイパス関係調査報告書	橋口達也	石崎曲り田遺跡 III
7	報告	12	1985	今宿バイパス関係調査報告書	橋口達也	東太田遺跡
8	報告	13	1991	今宿バイパス関係調査報告書	中間研志	奈良尾遺跡
9	報告	1	1980	二丈・浜玉有料道路関係	中間・小池・馬田	広田遺跡0区 竹戸遺跡 長須隈古墳
10	報告	2	1982	二丈・浜玉有料道路関係 II	中間研志	水付古墳 広田遺跡 多々羅遺跡
11	報告	58	1980	三雲遺跡 I	柳田康雄	
12	報告	60	1981	三雲遺跡 II	柳田康雄・小池史哲	糸島の繩文文化 仲田地区他
13	報告	63	1982	三雲遺跡 III	柳田康雄・小池史哲	糸島の古墳文化 サキゾノ地区他
14	報告	65	1983	三雲遺跡 IV	小池史哲	寺口地区 八龍地区中川屋敷地区他
15	報告	69	1985	三雲遺跡南小路地区編	柳田康雄	三雲南小路遺跡
前原町						
16	報告	1	1980	坂元古墳群	川村 博	古墳時代後期の2基の古墳群
17	報告	2	1980	正恵古墳群	川村 博	古墳時代前期の低墳丘墓群
18	報告	3	1980	上罐子遺跡群	川村 博	弥生時代～古墳時代の集落
19	報告	4	1981	釜塚	石山 純	5世紀の大型円墳
20	報告	5	1981	伏龍遺跡	川村 博	弥生時代終末の墳丘墓群
21	報告	6	1981	篠原新建遺跡	副島邦弘	弥生中期の墓群
22	報告	7	1982	曾根遺跡群	林 覚	平原遺跡以後の王墓軍
23	報告	8	1982	井原遺跡群	川村 博	昭和56年度の調査概要
24	報告	9	1982	怡土城郭内遺跡群	川村 博	
25	報告	10	1983	埋蔵文化財発掘調査概要	船津・川村	昭和57年度の調査概要
26	報告	11	1984	王丸浦ノ田	川村 博	後期群集墳
27	報告	12	1984	神在上ノ山古墳群	石井扶美子	後期群集墳
28	報告	13	1984	三雲遺跡群 I	村田文秀	弥生～古墳時代の建物・墳墓
29	報告	14	1984	曾根遺跡群 III	鍋島さとみ	
30	報告	15	1984	浦志遺跡A地点	常松幹雄	小銅鐸
31	報告	16	1984	志登遺跡群B地点	中村・常松	弥生後期～歴史時代集落
32	報告	17	1984	篠原新建遺跡 III	石井扶美子	弥生時代中期の墓群
33	報告	18	1985	志登遺跡群第5次調査	岡部裕俊	弥生～奈良時代の集落
34	報告	19	1985	井原遺跡群 III	川村 博	弥生後期～古墳時代集落
35	報告	20	1985	志登遺跡群第4次調査	林・岡部 他	弥生時代～中世集落
36	報告	21	1985	井原遺跡群 IV	岡部・川村 他	松井・上学地区概報
37	報告	22	1985	怡土城郭内遺跡群 III	川村 博	
38	報告	23	1986	高田遺跡群	岡部裕俊	弥生時代前期集落
39	報告	24	1986	井原遺跡群 V	林 覚	
40	報告	25	1987	井原遺跡群	岡部裕俊	弥生後期～古墳中期
41	報告	26	1987	大浦遺跡群発掘調査概報	川村 博	大浦地区調査概報
42	報告	27	1988	曾根遺跡群 IV	林 覚	
43	報告	28	1988	前原地区遺跡群 I	岡部裕俊	寺浦遺跡
44	報告	29	1988	高祖遺跡群	吉村・内布 他	怡土小学校
45	報告	30	1988	井原遺跡群 VII	林 覚	ムクナシ 赤崎 松井西
46	報告	31	1989	長野川流域の古墳群 I	岡部裕俊	長野宮ノ前遺跡
47	報告	32	1990	井原遺跡群 VIII	林 覚	ムクナシ地区
48	報告	33	1990	長野川流域の遺跡群 II	岡部裕俊	東高田遺跡

文献番号	種別	番号	発行年	書名	編著者	備考
49	報告	34	1990	平原周辺遺跡(1)	岡部裕俊	
50	報告	34-2	1990	多久高来田遺跡	川村 博	多久グラウンド用地
51	報告	35	1991	井原遺跡群	岡部裕俊	附編 井田用会支石墓
52	報告	36	1991	平原周辺遺跡(2)	岡部裕俊	
53	報告	37	1991	今宿バイパス関係埋蔵文化財 調査概要報告書	角 浩行	今宿バイパス概報
54	報告	38	1992	井原塚廻遺跡	林 覚	甕棺 壱穴建物群
55	報告	39	1992	今宿バイパス関係 埋蔵文化財調査報告 I	角 浩行	多久口木古墳群
56	報告	40	1992	前原地区遺跡群 II	岡部裕俊	上町相原遺跡
57	報告	41	1992	潤・壱丁田遺跡	瓜生秀文	古墳前期 土師器、木器
58	報告	42	1992	今宿バイパス関係 埋蔵文化財調査報告 II	角 浩行	東真方A-1号墳 東真方遺跡
59	報告	43	1992	平原周辺遺跡(3)	角 浩行	
60	報告	44	1993	高上石町遺跡	林 覚	弥生中期甕棺墓群
61	報告	45	1993	前原地区遺跡群 III	瓜生秀文	中世火葬墓群
62	報告	46	1993	蔵持古屋敷遺跡 高祖遺跡群 II	瓜生秀文	怡土小学校
64	報告	48	1993	今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 IV	角 浩行	東真方古墳群C群
65	報告	49	1993	本田孝田遺跡・東スヌ町遺跡	角 浩行	県道本加布里線
66	報告	50	1993	平原周辺遺跡(4)	角 浩行	
前原市						
67	報告	51	1994	井原地区周辺の古墳群	岡部裕俊	附編 西堂古賀崎古墳
68	報告	52	1994	篠原岸田遺跡 II	林 覚	弥生中期円形壹穴建物
69	報告	53	1994	井ノ浦古墳・辻ノ田古墳	林 覚	前原ゴルフ場内古墳群
70	報告	54	1994	篠原熊ノ後遺跡	瓜生秀文	
72	報告	56	1994	平原周辺遺跡(5)	角 浩行	
73	報告	57	1995	川原川右岸遺跡群 I	角 浩行	高祖地区調査
74	報告	58	1995	荻浦 古墳編	岡部裕俊	荻浦区画整理調査
75	報告	59	1995	平原周辺遺跡(6)	角 浩行	
77	報告	61	1996	平原周辺遺跡(7)	角 浩行	
78	報告	62	1996	三雲・井原遺跡群調査概要(1)	角 浩行	三雲南小路遺跡調査概要
79	報告	63	1997	三雲・井原遺跡 I	角 浩行	三雲南小路遺跡調査成果
80	報告	64	1997	泊桂木遺跡 1	岡部裕俊	元岡隣接 弥生時代建物群
81	報告	65	1998	川原川右岸遺跡群 II	角 浩行	末永地区
82	報告	66	1999	前原北側遺跡	林 覚	北新地の中期古墳
83	報告	67	2000	JR筑肥線複線化用地内遺跡群	瓜生秀文	JR複線化用地調査
84	報告	68	2000	前原西町遺跡	平尾和久	前原商店街調査
85	報告	69	2000	有田塞ノ本遺跡	平尾和久	県道有田大門線
86	報告	70	2000	平原遺跡	柳田・角	平原遺跡再調査
87	報告	71	2000	神在横畠遺跡	野田純子	釜塚古墳裏集落
88	報告	72	2001	長野川流域の遺跡群 III	岡部裕俊	飯原門口遺跡
89	報告	73	2001	荻浦天神社裏遺跡	瓜生秀文	後期古墳
90	報告	74	2001	蔵持境遺跡	瓜生秀文	
91	報告	75	2001	高祖遺跡群 III	上田健太郎	怡土小学校
92	報告	76	2001	高田小生水遺跡	江野道和	
93	報告	77	2001	三坂七尾遺跡	岡部・牟田	弥生中期甕棺 土壙墓 貨泉
94	報告	78	2002	三雲・井原遺跡 II	岡部・牟田	南小路遺跡 周溝
95	報告	79	2002	多久川流域の遺跡群	江野道和	多久川流域 古墳他
96	報告	80	2002	神在藤瀬家住宅	宮本雅明	江戸時代 農家住宅調査
97	報告	81	2003	釜塚古墳	岡部裕俊	第3次調査概要

文献番号	種別	番号	発行年	書名	編著者	備考
98	報告	82	2003	三雲・井原遺跡Ⅲ	牟田華代子	
99	報告	83	2003	井原1号墳	岡部裕俊	附編 高祖東谷1号墳
100	報告	84	2003	前原西町遺跡II	江野・江崎	北新地道路
101	報告	85	2003	高祖城	瓜生秀文	
102	報告	86	2004	三雲・井原遺跡IV	平尾和久	
103	報告	87	2005	銭瓶塚古墳	牟田華代子	クビレ部および前方部の確認
104	報告	88	2005	ワレ塚古墳	瓜生秀文	墳丘規模形状確認
105	報告	89	2005	潤地頭給遺跡	江野道和	調査概要
106	報告	90	2006	三雲・井原遺跡V	岡部・牟田	
107	報告	91	2006	池田井田遺跡	脇谷華代子	戦国時代城館濠
108	報告	92	2006	三雲・井原遺跡	江崎・樋崎	県道池田・瑞梅寺線工事
109	報告	93	2006	潤地頭給遺跡I	江野道和	
110	報告	94	2006	国史跡 怡土城跡	瓜生秀文	怡土城跡の統括報告
111	報告	95	2006	神在藤瀬家住宅(2)	前原市教育委員会	江戸時代農家住宅移築工事報告
112	報告	96	2007	潤地頭給遺跡II	江崎靖隆	
113	報告	97	2008	末永数蔵町遺跡	江崎靖隆	県道周船寺・川原線工事
114	報告	98	2008	泊桂木遺跡II	福田博右	
115	報告	99	2008	多久遺跡群	樋崎直子	奈良時代初期火葬墓
116	報告	100	2008	荻浦 集落生産遺構編	岡部裕俊	区画整理用地
117	報告	101	2009	末永数蔵町遺跡II	龍 孝明	
118	報告	102	2009	泊リュウサキ遺跡	平尾・田中	
119	図録	1	1980	伊都国歴史資料館展示品図録		伊都国資料館1
120	図録	2	1983	伊都の古墳		伊都国資料館2
121	図録	3	1986	古賀崎古墳	岡部裕俊	伊都国資料館3
122	図録	1	1992	荻浦の遺跡群1	岡部裕俊	調査速報
123	図録	2	1993	荻浦の遺跡群2	岡部裕俊	調査速報
124	図録	3	1994	荻浦の遺跡群3	岡部裕俊	調査速報
125	図録	1	1995	西堂・井原の文化財1	角 浩行	調査速報
126	図録	2	1996	西堂・井原の文化財2	角 浩行	調査速報
127	図録		1992	伊都 古代の糸島	岡部裕俊	資料館図録
128	図録	1	1996	上罐子遺跡-みえてきた伊都国人の くらし-	岡部裕俊	調査速報

二丈町

129	報告	1	1979	竹戸遺跡	佐々木隆彦	
130	報告	2	1986	曲り田遺跡	橋口達也	
131	報告	3	1990	萩の原古墳群1	古川秀幸	
132	報告	4	1991	曲り田周辺遺跡 I	古川秀幸	
133	報告	5	1992	曲り田周辺遺跡 II	古川秀幸	
134	報告	6	1993	曲り田周辺遺跡 III	橋口達也	
135	報告	7	1994	曲り田周辺遺跡 IV	橋口達也	
136	報告	8	1994	深江井牟田遺跡	古川秀幸	
137	報告	9	1994	木舟・三本松遺跡	村上 敦	
138	報告	10	1995	大坪遺跡 I	橋口達也	
139	報告	11	1995	大坪遺跡 II	古川秀幸	
140	報告	12	1995	木舟の森遺跡	村上 敦	
141	報告	13	1996	曲り田周辺遺跡 V	古川秀幸	
142	報告	14	1996	木舟・三本松遺跡 II	村上 敦	
143	報告	15	1997	木舟・三本松遺跡 III	村上 敦	
144	報告	16	1997	矢風遺跡	古川秀幸	
145	報告	17	1997	萩の原古墳群 II	津國 豊	

文献番号	種別	番号	発行年	書名	編著者	備考
146	報告	18	1997	早田遺跡	古川秀幸	
147	報告	19	1998	上深江・小西遺跡Ⅰ	村上 敦	
148	報告	20	1998	曲り周辺遺跡Ⅵ	古川秀幸	
149	報告	21	1999	深江・中道遺跡	津國 豊	弥生後期漆器容器
150	報告	22	1999	二丈中学校校内遺跡Ⅰ	古川秀幸	
151	報告	23	2000	実田3号墳	津國 豊	
152	報告	24	2000	森田遺跡	村上 敦	
153	報告	25	2000	大坪遺跡Ⅲ	古川秀幸	
154	報告	26	2001	才良木遺跡	村上 敦	
155	報告	27	2001	石崎曲り田遺跡(上・中・下)	古川秀幸	葬祭場用地調査 古代官道
156	報告	28	2002	吉井地区遺跡群Ⅰ	村上 敦	
157	報告	29	2003	二丈中学校校内遺跡Ⅱ	古川秀幸	
158	報告	30	2003	吉井地区遺跡群Ⅱ	村上・伊崎	中越遺跡
159	報告	31	2004	正覚寺境内遺跡	古川秀幸	近世初頭の古墓
160	報告	32	2004	吉井地区遺跡群Ⅲ	村上 敦	柚木田遺跡
161	報告	33	2005	広田遺跡Ⅳ区	村上 敦	弥生時代前期～中期の甕棺墓群
162	報告	34	2006	上深江海老ノ峯遺跡	古川秀幸	
163	報告	35	2006	瀬崎・中牟田遺跡	古川秀幸	
164	報告	36	2006	石崎大坪遺跡	古川秀幸	
165	報告	37	2007	森園遺跡	古川秀幸	
166	報告	38	2007	竹戸東縄手遺跡	古川秀幸	
167	報告	39	2008	深町遺跡	古川秀幸	
168	報告	40	2008	中道遺跡Ⅱ	古川秀幸	
169	報告	41	2008	深江辻遺跡	古川秀幸	
170	報告	42	2008	吉井水付遺跡	古川秀幸	
171	報告	43	2009	熊野神社東遺跡	古川秀幸	
172	報告	44	2009	二丈中学校校内遺跡Ⅲ	古川秀幸	
志摩町						
173	報告	1	1974	天神山貝塚	前川威洋	縄文時代貝塚
174	報告	2	1982	八熊製鉄遺跡・大牟田遺跡	井上裕弘	奈良時代製鉄
175	報告	3	1983	御床松原遺跡	井上裕弘	弥生～古墳時代集落
176	報告	4	1984	熊添遺跡	浜田信也	
177	報告	5	1985	稻葉古墳群	柳田・洞他	前期古墳
178	報告	6	1987	久保地古墳群	橋口達也	後期の玄武岩柱状節理積みの古墳
179	報告	7	1987	新町遺跡	橋口達也	弥生早前期の墳墓群
180	報告	8	1988	新町遺跡Ⅱ	橋口達也	弥生早前期の墳墓群
181	報告	9	1988	向畠遺跡・藤原遺跡	橋口達也	奈良時代製鉄・古墳
182	報告	10	1989	志摩町の絵馬	洞龍二郎	
183	報告	11	1990	新町遺跡Ⅲ	小池史哲	古墳前期の甕棺墓・石棺墓
184	報告	12	1990	吹切遺跡	小池史哲	奈良時代の製鉄
185	報告	13	1991	四反田古墳群	河村裕一郎	中期初頭の古墳群
186	報告	14	1991	新町遺跡Ⅳ	河村裕一郎	江戸時代墓
187	報告	15	1992	四反田古墳群Ⅱ	河村裕一郎	中期初頭の古墳群
188	報告	16	1992	新町遺跡Ⅴ	河村裕一郎	縄文後期貝塚・土壙墓
189	報告	17	1995	志摩町遺跡等分布地図	水曜歴史クラブ	
190	報告	18	1996	志摩町の絵馬 総集編	河村裕一郎	
191	報告	19	1997	引ヶ浦古墳	河村裕一郎	初区丘陵上の中期古墳
192	報告	20	1998	柿添・千町田遺跡	河村裕一郎	
193	報告	21	1999	久米遺跡	河合 修	弥生中期甕棺墓群
194	報告	22	2003	大峰遺跡	河村裕一郎	

文献番号	種別	番号	発行年	書名	編著者	備考
195	報告	23	2005	蓮輪遺跡	河合 修	
196	報告	24	2005	天神前遺跡	河合 修	
197	報告	25	2006	稻留地区遺跡群	河合 修	木藤丸遺跡 ウスイ遺跡
198	報告	26	2006	新町遺跡VI	河合 修	
199	報告	27	2007	谷古墳群	河合 修	後期古墳群
200	報告	28	2007	志摩町の庚申塔	元吉知子他	
201	報告	29	2008	志摩町所在被災史料目録	矢野・河合	
202	報告	30	2009	一の町遺跡発掘調査概要	河合 修	弥生時代の拠点集落
糸島市						
203	報告	1	2010	三雲・井原遺跡VI	江崎靖隆	ヤリミゾ地区
204	報告	2	2010	新町・御床松原遺跡	河合 修	
205	報告	3	2010	石崎矢風遺跡	古川秀幸	弥生時代前期の墓群
206	報告	4	2011	潤遺跡群 I	平尾和久	
207	報告	5	2011	吉森遺跡 I	村上 敦	
208	報告	6	2012	潤遺跡群 II	平尾和久	
209	報告	7	2012	三雲・井原遺跡VII	江崎靖隆	
210	報告	8	2012	吉森遺跡 II	村上 敦	
211	報告	9	2012	井田原開古墳	河合 修	全長90mの前方後円墳
212	報告	10	2013	三雲・井原遺跡VIII	平尾和久	三雲・井原遺跡の総括編
213	報告	11	2013	潤遺跡群 III	瓜生秀文	
214	報告	12	2013	吉森遺跡 III	村上 敦	
215	報告	13	2014	三雲・井原遺跡IX	平尾和久	
216	報告	14	2017	井原久保園遺跡	江崎靖隆	
217	報告	15	2017	篠原東遺跡群 I	江野道和	
218	報告	16	2017	新訂版 平原遺跡	岡部裕俊	平原遺跡の増補改訂版
219	報告	17	2018	三雲・井原遺跡X	平尾和久	
220	報告	18	2018	篠原東遺跡群 II	江野道和	
221	報告	19	2019	神在横畠遺跡2・志登尾北遺跡	秋田雄也	
222	報告	20	2019	国道202号線関係埋蔵文化財発掘 調査報告書	江野道和	多久口木3号墳
223	報告	21	2019	三雲・井原遺跡XI	平尾和久	
224	報告	22	2020	潤番田遺跡	平尾和久	
225	報告	23	2020	岐志花掛山古墳	江野道和	
226	報告	24	2020	史跡釜塚古墳	岡部裕俊	外堤径89mの大型円墳
227	報告	25	2021	篠原北ノ崎遺跡	秋田雄也	
228	報告	26	2022	志登・潤・浦志地区の遺跡群	江野道和	
229	報告	27	2022	海徳寺遺跡	平尾・秋田	
230	報告	28	2022	上罐子遺跡 第4次調査	岡部裕俊	谷部編
231	報告	29	2023	深江城崎遺跡	江崎靖隆	木器工房
232	報告	30	2024	深江石町遺跡	江崎靖隆	木器工房
233	報告	31	2024	上町古墳	秋田雄也	
234	報告	32	2024	蔵持寺ノ前遺跡	秋田雄也	
235	報告	33	2024	新町支石墓群	平尾和久	
町誌						
236	町誌		2009	新修志摩町誌		
237	町誌		2005	二丈町誌平成版		

伊都国歴史博物館紀要				
文献番号	種別	巻次	西暦	内 容
236	紀要	1	2006	生産と流通からみた伊都国と奴国(平尾和久) 三雲・井原弥生集落の成立と変遷(角浩行)
237	紀要	2	2007	破碎鏡と破鏡の時期的変遷とその認識(平尾) 国内出土の蝙蝠座鉢内行花文鏡についての一考察(江野道和) 泊一区出土獸帶鏡について(岡部裕俊)
238	紀要	3	2008	紡錘車の編年とその画期(平尾) 原始・古代船の推進具(上)(江野) ガラス玉副葬の小型甕棺墓(岡部)
239	紀要	4	2009	筑前国志麻郡における律令期祭祀と卜部の関係(樋崎直子) 原始・古代船の推進具を考える(中)(江野道和) 古代糸島地方と鉄(岡部)
240	紀要	5	2010	原始・古代船の推進具を考える(下)(江野) 長野川下流域の弥生～古墳時代の遺構と遺物(岡部)
241	紀要	6	2011	神在横島遺跡の製鉄関連遺構と遺物(岡部) 第六三四海軍航空隊玄界基地の遺品(古川秀幸) 糸島のト古神事1(古川)
242	紀要	7	2012	糸島の幕末～勤王の志士「大神壱岐守」の史料を中心に(江野) 糸島のト古神事2～淀川の日々手祭り～(古川) 上原勇夫氏採集資料～今山遺跡採集の石器類～(江野)
243	紀要	8	2013	曾根古墳群の記憶(岡部) 一貴山寂光坊青木家文書について(中牟田寛也)
244	紀要	9	2014	青木家所蔵雅楽譜について(江崎靖隆) 糸島地方の条理についての一考察(村上敦) 糸島地方出土の弥生時代ガラス集成(岡部) 山犬の尾C-5号墳の測量調査(岡部 他)
245	紀要	10	2015	西堂古賀崎古墳に関する新知見(岡部・大谷晃二) 糸島市内の領境石についての一考察(村上敦) 藤崎森吉氏収集資料I(中牟田)
246	紀要	11	2016	井原塚廻遺跡の再検討-弥生時代中期後半～後期の墳墓群の新資料から-(岡部) 雷山神籠石「南水門」の踏査結果及び雷山神籠石に係る交通路について(瓜生秀文)
247	紀要	12	2017	志登・潤地区の遺跡群(岡部裕俊) 井原トリノス1号墳の墳丘測量成果(岡部) 旧制糸島中学校成立史の再検討(原口大輔)
248	紀要	13	2018	火山瑠璃光寺経塚関連資料と糸島地域出土の経筒(河合修・阿部洪太郎) 福岡県立糸島高等学校郷土博物館所蔵資料紹介(米倉法子) 伊都国歴史博物館所蔵の弥生～古墳時代木器(岡部) 青柳種信が見た泊大塚古墳(岡部・中牟田)
249	紀要	14	2019	糸島地方における弥生～古墳時代の赤色顔料(岡部・河野摩耶・南武志) ヒョウタン形土器小考(平尾) 「平原から黒塚へ」に関する疑問(角) 怡土城出土の瓦塼に関する一考察(江崎靖隆)
250	紀要	15	2020	三雲・井原遺跡下西地区の方形環溝について(江崎) 糸島地域における井戸の時期的変遷と画期(平尾) 平原遺跡出土の異形金属器(岡部・比佐陽一郎・松園菜穂) 壱岐島の横穴式石室と九州(角)
251	紀要	16	2021	弥生時代の板石硯と文字の使用について(角) 深江中道遺跡出土の漆塗把手付容器について(岡部・金原美奈子・金原裕美子) 史跡銚子塚古墳の測量調査成果について(岡部・村上) 「大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍」に関する一考察(瓜生) 鳥帽子島灯台の記録と記憶(河合)
252	紀要	17	2022	臨機応変な石錐づくり(平尾) 三雲ヤリミゾ附近採集の鳥形容器をめぐって(岡部) 坂元古墳群1号墳出土の金属器(井上志峰) 高山上山古墳に関する新資料(岡部・中牟田) 「怡土城」築城における人間模様(瓜生)
253	紀要	18	2023	北部九州から出土する「背負梯子」の基礎的研究(岡部・増田啓) 刀伊の入寇についての一考察(瓜生) 《資料紹介》長方形板石硯・研石(角) 海徳寺遺跡出土片刃石斧生産関連資料の岩石学・地球化学的分析と考古学的意義(平尾・柚原雅樹・森貴教・川野良信)
254	紀要	19	2024	長野川流域古墳群の地域史的研究1-荒毛2号墳の発掘調査の成果から-(岡部) 觀世音寺領「船越荘」についての一考察(瓜生) 板石硯擦過実験報告(角)